

【記述力の練成技術】

令和5年(2023年)10月11日改訂

【記述力の練成技術】

■表現の本質

・開成中学で開示された模範解答に、記述解答の採点基準として、かつて次のように記述されていたことがありました。「言葉の係り受けが正確であること、文章のつながりが適切であること、読みやすく誤字のない表記であることなども、重要な要素です(平成14年度/2002年度入試)」、「本文中の言葉や自分なりの言葉を使って、説得力のある文章を作り上げる力が大切です(平成15年度/2003年度入試)」、「解答にあたって求められているのは、…(中略)…正確な、伝わりやすい表現が工夫されていることです(平成16年度/2004年度入試)」。

・これを読んでわかることは、表面的には「単に機械的に切り貼りをしただけのような記述答案や、趣意(しゅい)のはっきりしない記述答案には十分な評価を与えられない」といった技術的な側面での評価基準です。しかし、一步踏(ふ)み込んでみると、そこにあるのは、「自分の考えをしっかりと持ち、それを論理的、かつ正確に、他者に対してしっかりと伝える力」を素養として備えた者に入学してきてもらいたいという、人間同士の生身(なまみ)のコミュニケーションを前提とした、開成中学の発するメッセージの深遠な本質です。

・普段、机に向かうばかりが勉強ではありません。時に外界に目を広げ、五感を働かせながら、一つひとつの事象や問題について、触れ、感じ、考えてみる。一つひとつの問題について、それを「自分の中でしっかりと受け止める」こと。そして、「自分が考えたことや感じたこと」を「他者に対し本気で伝えたいと欲(ほっ)する」こと。さらに、それを「工夫しながら表現し、正確に伝える」こと。

・開成中学は、受験生に対して、実は何も特別高度なことを要求しているわけではありません。書くうえで、話すうえで、「伝えることは表現の本質」であり、社会を生きてゆく中で、人と人とのコミュニケーションを根本に据(た)えて、「伝える力の大切さ」という、ごく基本的で当たり前のことを認識し、そのうえで、将来をきちんと見据(た)え、着実な歩みとともに、しっかりと学業に取り組んでもらいたいという、そんな意味のこめられたメッセージと受け取ることが出来ます。

・「伝え合うこと」の意味をよく考え、それを自らよく受け止め、言葉に関わる姿勢や取り組みを今一度見直し、普段の言語生活をより豊かに変えてゆくこと、自分自身を磨(みが)き、自分自身の生き方を見定めながら、未来に向けて意志的に歩みを進めてゆく、そんな自分自身に育ててゆくことが、学ぶ者の姿勢として大切です。

■《開成基準》で記述訓練に取り組む

・「正確な、伝わりやすい表現を工夫する」、「説得力のある文章を作り上げる力」。開成中学は特別に高度な記述力を要求しているわけではありません。求められているのは、「自分の考えをしっかりと持ちなさい」、「それを他者に対して正しく、確かに伝えられる自分でありなさい」、「基本を疎(おろそ)かにしてはいけない」、というだけの至極(しごく)当たり前のことに過ぎません。難関校に限らず、いずれの中学校を受験するにしても、これを《開成基準》として強く念頭に置いて記述学習に取り組むことで、君の記述答案の水準は今後、劇的に変化してゆくことでしょう。

・ちなみに開成中学では、「漢字の書き取り」については、「解答にあたって求められているのは、正確に書かれた読みやすい漢字であることです(平成16年度/2004年度入試)」としています。自分が書く文字についても、「伝える手段」の一つとしてあらためて捉(とら)え直し、いずれの中学校を受験するにしても、また、普段の生活においても、読み手のことを念頭に置いてきちんと書いて伝えられるようにしましょう。

■記述指導

・集団指導や個別指導でいくら「詳細な解説」を受けたとしても、あるいは、先生から答案に「丁寧な添削(てんさく)」を受け、「コメント」を細々(こまごま)と熱心に書き込んでもらっても、子どもにその後の「仕上げ作業」が伴(ともな)っていないのであれば、いつまで経っても精度の高い記述答案を書き上げられるようにはなりません。

・塾の先生に、質問という形で、少しでもあっても時間を割(さ)いてもらい、「生徒と先生との生きた言葉での直接のやりとり」を通して、「両者が納得のいく水準、精度にまで記述答案を練り上げていくような取り組みを継続しないと、結局は「書きっぱなし、やりっぱなし」に終始し、本来的な記述力の向上は不可能です。塾の先生は、自分の担当する生徒たちが質問に来てくれるのを待っています。塾(の先生)を徹底的に利用しましょう。

・ただし、突然の訪問は避(さ)け、先生の都合を予(あらかじ)め確認し、依頼(いらい)の気持ちを自分の言葉でしっかりと伝えてください。そして、先生に解決を丸投げするのではなく、疑問について「何をどう改めるべきか」を自ら熟考(じゅっこう)し、「自分なりの準備」を十分に済(す)ませたうえで質問に向かってください。

■大原則

①設問の要求を正確に把握する

・設問がまず「何を要求しているのか」を正確に捉(とら)え、正しい方向に沿(そ)って思考すること。また、「その要求を、自分に与えられた問題としてしっかりと受け止める」ことで、見当違いの思考やミスが必然的に無くなっていく。

②趣旨を固定する

・「自分が伝えたい内容を明確に固定する」こと。正確な読解に基づき、趣旨を明確に固定すれば、「解答要素は自動的に集まってきてくれる」。

③正確で、伝わりやすい表現を工夫する

・「正確で、伝わりやすい表現を工夫すること」は、「表現の本質」だと言える。御三家中学を目指していながら、単に切り貼(はり)りをしただけのような、機械的で稚拙(ちせつ)な、読み手に何も伝わってこない記述答案しか書けない受験生が驚くほど多い。入試答案を採点する先生のうんざりした表情が目につかぶようだ。今の中学受験は、「算数さえ得意なら何とかなる」という時代ではない。むしろ「国語はできて当たり前」にしておかなければならない。自分の考えが読み手によく理解されるような表現力や説明力をしっかりと磨(みが)いておこう。

■基本

①主語・述語

・一文一文、文意が正しく伝わるよう、主語・述語の整った文章を心掛けよう。

②係り受け

・趣旨や文脈が乱れないよう、係り受けを意識して正しく表現しよう。

③誤字・脱字

・誤字・脱字の無いよう、「書きながら確認」する注意力が必要。

④句読点・符号は一字扱い

・一般に「句読点、符号等は一字扱い」が原則となっている。原稿用紙の書き方の決まりと、模試や入試での書き方の決まりとは異なるため、句点や読点を行の冒頭に打たねばならない場合がある。

⑤口語体(会話表現)や俗語を使用しない

・「～けど」、「あったかい」、「おんなじ」等の口語体は使用しない。また、「違(ちが)くて」、「ばれる」等の俗語も使用せず、「違い、知れる」などと言い換える。「むかつく」は俗語ではないが粗暴な印象を与えるので「腹が立つ」、「腹を立てる」などと言い換える。

⑥文体統一

・文体は常体(「～だ、～である言葉」)で統一する。 ※ちなみに「です・ます言葉」は「敬体」という。

⑦文中語句・自分の言葉

・「本文中の語句を使用して」とある場合には、本文中で使用されている語句をできるだけ多く使用する。

・「自分の言葉で」とある場合には、説明に必要な語句を除き、本文中の語句はなるべく使用せず、自分の語彙(ごい)力を駆使(くし)して説明する。

⑧不明確な比喩(ひゆ)表現の使用は避(さ)ける

・例えば、「海のような心の持ち主」という表現は、たとえている内容が「広い、大きい、静かだ、穏やかだ、包(つつ)み込むような深さ、荒々しい…」というように受け取り方がさまざまに異なり、客観的な説明が成立しない。

⑨自分の使える漢字は使う

・普段の言語生活がそのまま一枚の答案に反映する。言葉に関わる姿勢を保って学習しよう。

⑩無駄なく、正確な内容で表現する

・一文50～60字程度で無駄なく正確な内容で表現する力を身に付ければ、あとは「文どうしのふさわしい連結」によって、「一文100字」であっても正しい文脈で趣意の明確な叙述(じょじゅつ)ができるようになる。



■技術的基本①

①文末処理

・設問の要求に沿って、文末を正確に対応させる。

- ・なぜ？ どうして？ 理由は？ …… ～から。～ため。～ので。
- ・何ですか？ …… ～こと。～もの。～体言。
- ・どういうこと？ …… ～（という）こと。
- ・どのような意味？ …… ～（という）こと。
- ・どのような内容？ …… ～（という）こと。
- ・どのような気持ち？ …… ～（という）気持ち。
- ・どのような様子？ …… ～（という）様子。
- ・どのような点？ …… ～（という）点。
- ・どうしていますか？ …… ～している。
- ・どうしましたか？ …… ～した。
- ・どうしていましたか？ …… ～していた。

②前提事項の重複記入に注意

・「設問文中の前提事項」を重複記入しない。

※例えば、設問で「太郎の気持ちを説明しなさい」と求められているのなら、太郎を前提として説明すればよいのだから、文脈上必要な場合を除き、あらためて「太郎は…、太郎の…、太郎に…」のように何度も書き重ねる必要はない。

※「前提事項の重複記入」に意識が向かず、制限字数を圧迫して解答要素をはじき出してしまっている受験生が、上位生を含めて非常に多く見受けられる。

③重複表現を避ける

・文脈上必要な場合を除き、記述説明に「同語・同義語」を重複使用しない。制限字数を圧迫する原因となるだけでなく、解答要素をはじき出してしまう原因ともなる。

④倒置・再構成

・「語句の倒置」や「パーツ全体の再構成」を適宜行い、無駄の無い、内容の整理されたわかりやすい文脈を構成する。

⑤長い主語の構成

・短い主語での書き出しは、「～で、～で、だらだら」と稚拙で冗長な文章になりがち。

※例えば、「花が→庭に美しく咲いており、…」を「庭に美しく咲いている花が、～」のように、関連語句をまとめて「中心主語」の上に載(の)せ、「長い主語」を構成して書き出すことで、それに続く文脈もすっきりとし、わかりやすくなる。

※「長い主語の構成」以外にも、「修飾語」や「述語」も意味的にまとめる工夫をしてみよう。

⑥語句の短縮

・動詞や語句を適宜短縮する。(例：食物にふくまれている脂肪＝食物にふくまれる脂肪)

⑦趣旨を文章後尾に置く

・趣旨(伝えたい中心内容)が文章全体を支配する。解答要素を含んでいても、趣旨が異なれば文章全体を殺してしまう。「解答の核」となる趣旨を文章末尾に固定したうえで文脈を構成しよう。

⑧具体性を高める

・言葉を整理して、具体的でわかりやすい文章を心掛けよう。

⑨「が」と「は」の使い分け

・「太郎が」と「太郎は」とでは意味、用法が異なる。文意、文脈に沿ったふさわしい表現を選択する。

⑩句読点

・読み誤りや読みにくさを避けるため、「意味の流れが途切れる所」や必要な場所を適宜判断し、「読点(、)」を打つ。また、叙述(じょじゅつ)が完結したら「句点(。)」を打つ。「一つ言いたいことを述べたらテン(読点)を打つ」ことを意識しながら文脈を構成するとよいだろう。

■技術的基本②

①適切な動詞の選択：「ある」「いる」「やる」「する」で済まらず、内容にふさわしい動詞を適宜使用する。

②本文表現の尊重：筆者や作者の意図により選択された表現を必要以上に変更しない。

③文末の心情表現：「安心する気持ち(体言処理)」、「安心している(動詞処理)」のいずれで表現しても可。

④意志・推量表現：助動詞の「う・よう・まい」を適宜使用し、正確な表現とニュアンスを工夫する。(例：去ろうとした。逃げようとした。嘘(うそ)はつくまい。)

⑤希望表現：助動詞の「たい・たがる」を適宜使用し、正確な表現を工夫する。(例：行きたがった)

⑥「～ている・～てある」は「～た」に置き換えが可能：例：「壁に掛かっている時計＝壁に掛かった時計」・「紙に書いてある文字＝紙に書いた文字」

⑦ニュアンスの調整：自分の語彙(ごい)力を駆使(くし)し、「説明にふさわしいニュアンス」で表現する。

⑧語句の補完：説明を完結させるために必要な語句を判断し、適宜補う。

⑨自由スペースでの字数の推定：マス目の無い解答欄では、抜き出し問題等のマス目のある解答欄等を利用し、要求されている字数を推定する。

※一般に「縦一行25字」が平均であるが、模試や各学校の解答スペースに合わせて適宜推定する。

⑩指定字数の順守：「～字以内」とある場合は少なくとも八割以上書き、「～字程度」とある時は、極力指定字数に近づける。

⑪文脈構成：文脈の乱れや「ねじれ」に注意する。

⑫指示語：指示語を使用する際には、文脈上正しい使い方をすること。また、指示語を使わない文脈を工夫すれば制限字数を無駄に圧迫せずに済む場合が多い。

■技術的基本③

①強調表現：文章に説得力を与えるための工夫の一つ。

②共感度を高める：対象への深い共感や理解をもとに、それを十分に表現する。

③説得力を与える：読み手を説得する内容や表現の工夫を行う。

④抽象表現化：語句を適宜(てきぎ)抽象化し、簡潔明瞭(かんけつめいりょう)な文章を工夫する。普段から文章に適宜「概念語(がいねんご)」を使用できるよう練習しておこう。

⑤文章構成・展開：文章全体の構成や展開を工夫し、説得力を与えよう。

⑥文章に流れを作る：読み手の十分な理解を意識し、文章に流れを作り、説得力を与えよう。

⑦書き出しの変更：当初の書き出し方で行き詰(づ)まったら、即座に頭を切り換えて新たに別の書き出しで臨(のぞ)む。普段から「文の書き出しを適宜切り替える」訓練を積んでおこう。

⑧要約・凝縮：各部を適宜凝縮する。無駄のない表現で的確に内容を伝える工夫をする。

⑨表現の変換：状況に応じ、適切な表現に言い換える。

⑩反照代名詞の利用

・「自分」という語を適宜利用し、誰の視点からの説明かを明確にする。

⑪連結表現：「～で、～で、だらだら」型の稚拙(ちせつ)で冗長(じょうちょう)な文章とならないよう、連結表現を工夫する。

- ・～することで/～によって(原因・理由) ・～ために(目的/原因・理由) ・～として(資格)
- ・～にもかかわらず/～でありながら/～ものの/～つつも/～ながらも(逆接)
- ・～するとともに/～だけでなく(添加・並列) ・～と同時に(並行) ・～うえで(前提)
- ・～ことに/～に対し(対象) ・～ことが(論点) ・～せずに/～することなく(否定)
- ・連用中止法：動詞や形容詞、形容動詞などの語を連用形で一旦(いったん)中止して、その後に文を続ける方法。「よく学び、よく遊べ」、「頼もしく、愉快(ゆかい)な人物」、「静かに、ゆつくりと歩く」など。直後に読点を打つこと。
※「～ので/～から(理由・原因)」、「～が/～のに(逆接)」、「～で/～して(添加)」を使いすぎると稚拙(ちせつ)で冗長(じょうちょう)な文章となるので注意。

■暗黙の前提(暗黙の了解)

・「わざわざ言明せずともわかりきった前提」を「暗黙の前提」という。記述上の高度な技術の一つとして、「暗黙の前提」の利用がある。簡単な例では、「建物の中から外へ飛び出す」という表現では、「建物の中から飛び出す」、あるいは、「建物から外へ飛び出す」、「建物から飛び出す」としても、意味的にはほとんど違いは無い。文脈上、「飛び出す」行為に「中から外へ」の意味が暗黙のうえに了解されるためだ。「暗黙の前提」を記述説明に利用する場合には、「文章全体の流れや、文意、文脈を踏(ふ)まえ、文字数も勘案(かんあん)しながら表現の調整を行う」とよい。